

説 教

聖日礼拝 北浜チャーチ
黒田 禎一郎

2020年8月23日（日）

主 題：「寄留者として生きる」

—力の源泉—

テキスト：1 ペテロの手紙2章11-12節（11節）

はじめに

・『例 話』

考古学という学問があります。文字通り、遺跡や文献を通して「古いこと（昔）を調査する学問」と思います。イスラエルには考古学上の遺跡が多々あり、遺跡の宝庫と呼ばれています。BC1千年、2千年という古い町が遺跡となつて残っているからです。それは石文化であるからです。

- ・世界最古の町の一つと言われるエリコは、遺跡発掘によってBC8千年の町の城壁の跡が発掘されました。考古学者たちが努力を重ねて、発掘しました。何よりも興味深いことは、聖書に出てくるイスラエルの町村、城、宮殿、住居、そしてシナゴグなどが、最近の考古学の発展によって、次から次へと発掘されてきたことです。
- ・しかも、それは聖書の信ぴょう性にかかわるものです。聖書に記録されていることが事実かどうか、考古学は今その信ぴょう性を示してくれています。神様は今世紀に入り、急速に考古学を発展させられました。
- ・その1つは、あの「死海写本」の発見でしょう。イスラエルには、分かっているだけで、まだ発掘されてない遺跡は数千カ所もあると言われています。
- ・イエス様時代のエルサレム神殿跡も、同じく次々と発掘されています。石文化の遺跡があるイスラエルでは、そのまま残っているからです。

- ・聖書は次のように述べています。

2:6 聖書にこう書いてあるからです。「見よ、わたしはシオンに、選ばれた石、尊い要石を据える。この方に信頼する者は決して失望させられることがない。」

- ・歴史の中に生きる神が、このように語っておられます。前回、私たちは「神の民として生きる」というテーマで学びました。神の民とはどんなに幸いな立場に置かれているか、聖書から教えられました。以前は、神の民として生きる者ではありませんでしたが、今は神の民として生きる者とされました。じつに幸いな者とされました。
- ・さらに「神の民」というテーマは続きますが、今度は周囲の人々との関係に

ついて、ペテロは教えています。すなわち、私たちが社会や家庭において、「神の民」として、どう生きるかという課題であります。

- 今の「コロナ・パンデミック」の中、先が見えない中で、どう生きるかは大きな課題です。人々は確かな道、安全な道、心安らかにできる道を求めています。神を信じるキリスト者も同じです。新約聖書は約2千年前の書物ですが、現在の私たちにも語り教えてくれる書物ですから幸いです。なぜなら、聖書は神の書であるからです。
- ところで。今日の聖書箇所は、ペテロがこれから語ることの土台、基礎となるものです。ペテロは「キリスト者とは何か」、そして「キリスト者への勧め」について勧めを記しています。

大切なポイント

1. キリスト者とは何か

2:11 愛する者たち、私は勧めます。あなたがたは旅人、寄留者なのですから、たましいに戦いを挑む肉の欲を避けなさい。

(地図を引用)

1) 神に愛されている者

- ペテロは「愛する者たちよ」と呼びかけています。愛する者たちとは、誰のことでしょうか。それはこの書簡の受け取り人です。彼は当時の小アジア（現在のトルコ）に住む、離散したユダヤ人キリスト者です。それはイエス様をメシアと信じた同胞ユダヤ人キリスト者です。彼らは広大な小アジアに住む聖徒たちでした。
- ペテロにとって「愛する者たち」とは、神に愛された人々のことです。神に選ばれ、神の恵みに与った聖徒たちであります。天地の創造神である神に愛されている民のことです。神の愛は、神の本性であり不変であります。
- 私たちは物事が順調に進んでいるときには、「神に愛されている」と感じるものです。しかし、困難に出会ったり、道が塞がれたり、思いがけない事故に出会ったり、またつらい経験をしたりすると、「神に愛されている」とは本当であろうか、と思うものです。
- 神は私をお見捨てになられたのではないかと、思うものです。しかし聖書は、そんな場合でも、「神に愛されている」ものであると教えています。
- 今回の長期にわたった梅雨、例年にないほどの長い長い梅雨でした。毎日、雨雲が垂れ込めていましたね。湿度は異常で、私の部屋では最高94%までアップしました。しかし、その上空には明るい太陽が輝いていました。それ

は飛行機で飛ばば一目瞭然であります。

- どんなに厚い雨雲であっても、その上には明るい太陽が輝いているように、神の愛は変わることはありません。イエス様はこう言われました。

ヨハネの福音書

15:16 あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命しました。それは、あなたがたが行って実を結び、その実が残るようになるため、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものをすべて、父が与えてくださるようになるためです。

- 前に引用しましたが、イザヤ書49章をもう一度お読みしましょう。
49:15 「女が自分の乳飲み子を忘れるだろうか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとえ女たちが忘れても、このわたしは、あなたを忘れない。」
- 神を信じる者、神の愛に包まれているキリスト者は、いつまでも離れられない神の子となっています。ですから、決して見捨てられるようなことはありません。それはキリスト者の幸いの1つです。ペテロは、もう一点キリスト者の幸いを述べました。

2) キリスト者は旅人、寄留者である

- ペテロはこの書簡のはじめで次のように述べました。
1:1 イエス・キリストの使徒ペテロから、ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニアに散って寄留している選ばれた人たち、
1:17 また、人をそれぞれのわざにしたがって公平にさばかれる方を父と呼んでいるのなら、この世に寄留している時を、恐れつつ過ぎなさい。
- そして今日の箇所でも、こう述べました。
2:11 愛する者たち、私は勧めます。あなたがたは旅人、寄留者なのですから、たましいに戦いを挑む肉の欲を避けなさい。

『例 話』

- 前にもお話ししましたが、私は22歳から35歳までの約12年間、ドイツに住んでいました。私はドイツで家内と結婚し、家内はドイツで9年間生活しました。神は私たちに3人の子どもを授けてくださいました。子どもたち3人も、ドイツで生まれました。私たちにとって、長年住んだドイツには故郷のような気持ちがあります。
- しかし、それでもそこは「私の国」ではありません。自分が寄留者であることを意識させられ時は、ビザの延長手続きの時でした。学生ビザであれ、労働ビザであれ、ドイツ国籍がない人は滞在許可をもらわなければなりません。寄留者であったからです。

- ・この聖書の言葉が、教えようとしていることは、この世界での生、現在の生は、ほんのいつときの旅のようなものであることです。外国に滞在するようなものであって、そこにずーといるわけではないということです。ですから、永住するかのように生きるのではない、ということです。そして、そのような生き方をする者として、どのように生きるべきか、ペテロは次の2つの勧めを述べました。

2. キリスト者への勧め

1) 肉の欲を避けなさい

2:11 愛する者たち、私は勧めます。あなたがたは旅人、寄留者なのですから、たましいに戦いを挑む肉の欲を避けなさい。

- ・皆さん。「肉の欲」というと、食欲、物の所有欲、性欲、身体の欲求ととられやすいものです。元来、欲そのものは決して悪ではありません。神様は欲を祝福として備えられました。ここで注意しなければならないことは、神は私たちに禁欲生活を送るようにされていないことです。神が与えてくださった欲は、神の祝福であります。
- ・仮に何かを食べたいという食欲がなければ、食べても味気ないでしょう。読書をしたいという読書欲がなければ、読書は楽しくはないでしょう。スポーツをしたいという運動欲がなければ、運動も楽しくはないでしょう。
- ・ですから、本来神様が与えてくださった食欲、読書欲、運動欲、性欲などは良いものです。聖書がいう「肉の欲」とは、それとは違います。「肉の欲」とは神に反発し、神に背を向けて、自己中心に生きる欲望のことです。
- ・聖書は「肉の欲」を避けなさい、と教えています。
では、なぜ、「肉の欲」を避けなければならないのでしょうか。それは、「たましいに戦いを挑む」からです。神様によって与えられる霊的な幸い、たましいの平安や満足を奪ってしまうからです。
- ・先進国で物質豊かな生活を享受している私たちは、「肉の欲」を刺激する多くの情報にさらされています。いかがでしょうか。男性であれば、自動車、パソコン。新しい機種が出ると、手に入れないではいられなくなるのです。女性であれば、流行を宣伝するファッション雑誌が、欲望を刺激するかも知れません。
- ・私たちはどうでしょうか。自分はどんな欲にひかれやすいか、意識したことはあるでしょうか。「肉の欲」の追求にエネルギーを注ぐと、神様との関係は逆にやせ細ってしまうことです。教会に来て、神との交わりによって与えられる深い満足や平安は、どこかへ行ってしまいます。霊的に貧しくなり、

内なる人は痩せ細ったキリスト者になってしまいます。

- ですから、自分の心を探り、どんなことに「肉の欲」の追求があるか、神様の前に正直に告白することです。そして赦しをいただくことです。イエス様が流してくださった聖い御血は、私たちの不義を洗いきよめてくださいます。まことの平安と満足を得る道は、そこにあるのです。
- ペテロはもう一点、大切なことを勧めています。

2) 異邦人の間で生きなさい

2:12 異邦人の中であって立派にふるまいなさい。そうすれば、彼らがあなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたの立派な行いを目にして、神の訪れの日に神をあがめるようになります。

- 異邦人とは、キリスト者ではない人です。日本はその意味で異邦人の地といえましょう。共産主義の中国でも、人口14億人の内、地下教会だけで1億人はいると言われています。少なく見積もり、その半分であるとしても約5千万人です。お隣の韓国は4、5人に1人はクリスチャンと言われます。北朝鮮でも、多数のクリスチャンが地下にいることは分かっています。
- 日本では100人に1人、あるいは200人に1人であるかもしれませんね。周りの人々はみな、キリスト教とは関係のない人たちと言えるかも知れません。
- 同じように、この手紙の受け取り人たちはギリシャ文化の中で生きていました。その人々にとって、キリスト教ははじめ理解しがたいものでした。クリスチャンはギリシャの神々の礼拝に参加しない、ギリシャの伝統的な祭りに参加しないために、非難されました。また時の支配者ローマ帝国の皇帝礼拝にも加わらないキリスト教徒は、社会に同化しないと恐れられ悪く言われました。
- 当時、生きた歴史家スエトニウス (Suetonius, AD70-140 頃) は、著書「ネロ伝」で「キリスト教はいかがわしい迷信である」と述べています。またある者たちは、クリスチャンは密かに人肉を食べているなどと、悪評を立てました。おそらく聖餐式で記念するぶどう酒を飲んでいたのでしょう。
- このような悪評が一度広がると、それを消し去ることは容易ではありません。今でいうフェイクニュースですね。ですから、そのような風評が広がらないよう、神のしもべとして、ふさわしい生活をする必要があります。
- ペテロはここで、そのような聖徒を励ましました。

2:12 異邦人の中であって立派にふるまいなさい。そうすれば、彼らがあなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたの立派な行いを目にして、神の訪れの日に神をあがめるようになります。

- ・「異邦人の中にあつて立派にふるまいなさい。」

このみことばは、私たちを励ましてくれます。私の内には、立派に生きる力はありません。しかし今は違います。以前は、神の民として生きる者ではありませんでしたが、今は神の民として生きる者とされました。今は「力の源泉」がどこにあるか知っていますから感謝であります。

- ・ヤコブは次のように述べました。ヤコブの手紙5章

5:13 あなたがたの中に苦しんでいる人がいれば、その人は祈りなさい。喜んでいる人がいれば、その人は賛美しなさい。

苦しみの中にあれば、祈ることです。喜びの中にあれば、賛美しましょう。ヤコブはそこにキリスト者が生きる「力の源泉」があることを知った人でした。

- ・いかがでしょうか。私たちも異邦人の中にあつて、立派に生きる者とされようではありませんか。それには私たちが生きる「力の源泉」がどこにあるかを、はっきりと知らなければなりません。神のみことばを信じ、歩んでまいりましょう。

ま と め

主 題：「寄留者として生きる」

—力の源泉—

- ・私たちはこの地上では、「寄留者として生きる」ものです。寄留者は旅人であり、行先（目標）があります。そうです。天の御国です。私たちは今、天のエルサレムに向かい生きる旅人であります。神に愛され、選ばれた民として、天の御国に向かい歩むものです。
- ・その旅路において、私たちは力を必要とします。その「力の源泉」は、私ではなく神様にあります。最後に、ヤコブが勧めたみことばをもう一度お読みします。ヤコブの手紙5章

5:13 あなたがたの中に苦しんでいる人がいれば、その人は祈りなさい。喜んでいる人がいれば、その人は賛美しなさい。

* God bless you !